

1	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	17104001	複素構造と解析的・幾何学的不変量の統合的研究	野口 潤次郎（東京大学・大学院数理科学研究科・教授）	A
<p>(意見等)</p> <p>我国における複素幾何学に対する貢献は世界的に認められている。また、人材も厚く、統合的研究を可能にする基礎がある。本研究は、伝統の延長線上にあるとはいうものの、複素構造と不変量の関係に対する新しい視座を設けながら、海外の研究者を含めたネットワークの中で研究の新展開を目指すものであった。値分布理論やCR構造など、それぞれ着実な研究成果を挙げている。</p> <p>なお、ブレークスルーといった研究成果はないものの、長いタイムスパンで考えれば、その萌芽は確実にあり、継続的研究の下で将来の展開に期待ができる。ネットワークと情報発信も定着し、将来の研究に向けた努力も実りがあるものになっている。</p>				
2	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	17104002	銀河系に於ける星間ガスのイオン化状態の大域的構造と星-ガス循環過程の定量的研究	吉井 讓（東京大学・大学院理学系研究科・教授）	A
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、南米チリの標高5000m級のサイトに小口径赤外線望遠鏡を設置し、通常では観測困難な近赤外線の水素原子再結合線スペクトル（Pa アルファ）を観測し、銀河系における星間物質の循環と銀河進化を明らかにすることを目的としている。</p> <p>研究計画の前半では、サイトと望遠鏡・検出器等の開発を行い、最後の2ヵ年で観測を実施する計画である。中間報告書によれば、若干の遅れはあるものの、おおむね計画は予定どおり進行しており、所期の成果が期待されるとのことである。計画の変更点として、撮像装置の視野が、当初計画の1度平方から5分平方に大きく変更されている。その理由として、望遠鏡光学系の制約と、多数の天体が観測されることによるコンフュージョンの影響が当初予想よりも深刻であり、視野の削減が必要となったと説明されている。</p> <p>書類審査において問題となった諸点についてヒアリングにおいて説明を受け、さらに質疑によって内容を精査した。その結果、計画変更はやむを得ない事情であると判断し、A評価が妥当であり、このまま進めることが適当であるとの結論に至った。今後は、開発中の機器を早期に完成させ、観測による成果を挙げていただきたい。</p>				